

財団法人 日本塗料検査協会

技術顧問 吉田 豊彦

第28回のISO/TC35ウイークが6月11日(月)から15日(金)まで、アメリカ合衆国のピッツバーグで行われた。今年もそれに参加することができたので、その模様をお知らせするようにとの要請があった。もっとも議事の詳細を記すには相当なページ数が必要だし、いずれ国内委員会で報告するからここではごく概略の、むしろアトモスフェアをお伝えするように努めよう。

仮名でピッツバーグと書く町は私の手持ちのエンサイクロペディアには3つ載っている。サンフランシスコの東北40マイルにあるカリフォルニア州のPittsburg, カンザス州のカンザス市の127マイル南のPittsburg, そしてフィラデルフィアの25マイル西のペンシルヴァニアのPittsburghである。最後のピッツバーグのみ語尾がghである。今回のISO/TC35ウイークはこのペンシルヴァニアのピッツバーグで行われた。

この会議を「TC35ウイーク」と呼ぶわけを紹介しておこう。日本がTC35のPメンバーになったのは1987年であった。その最初の国際会議は同年9月、ハンガリーのブダペストで開かれ、日本からは6名が参加した。その次にTC35とそのSC、WG(TCは専門委員会、SCは分科委員会、WGは作業グループ)の会議が開かれたのは1990年5月オランダのロッテルダムであった。この時、規格の審議に年月がかかり過ぎるとの反省から、毎年会議を開催して審議を促進しようという決議がなされ、以降毎年開かれている。そしてこの会議ではSCもWGもこのときに開くと便利なので、たいいてい月曜から金曜か土曜までで、先ずWGの会議があり、次にSC、そして最後にTC、そのあとで主なセクレタリーによる実務者の調整会議という順序で行われる。我々が参加するのはTCまでである。も

っともSCもWGもそれぞれの課題によっては必要に応じてTC35ウイーク以外のときに開くこともある。以上のような開きかたをするので、この月曜から週末までをTC35ウイークと呼ぶのである。

さて、今回の会議に出席したのは次の7名である。豊田常彦(日塗工、TC35事務局)、井関匠三(日塗検、SC9事務局)、筒井晃一(日本ペイント)、田邊弘往(大日本塗料)、田中丈之(かきとう)、舩岡茂(日油BASF)、吉田豊彦の7名、これに須賀茂雄氏がTC156及びASTMメンバーとして加わった。特に「ASTMメンバーとして」と記したのは今回の会議はASTMのD-1(塗料試験法の委員会)とオーバーラップして開かれ、部分的にはジョイントしているからである。



会議は11日(月)午前9時から始まる。会場はダウンタウンのウエスチン・ウイリアム・ペン・ホテル。中2階の大小数室が会議フロアになっていて、ISO,ASTMだけでなく、他の会議も併行して行われていた。ASTMは10日から13日まで、殆ど30分刻みか1時間刻み位で3会議位が、ISOは

11日から15日まで、午前午後それぞれ1乃至2会議が同時進行で行われる。

ISOの議事については国内委員会で報告するので、私はトピックというか、印象をうけたことを記そう。

1. ASTMとISO

TC35がアメリカで開かれるのは3回目である。ASTMは以前はISOに対してそれ程積極的ではなかった。10年位前にはアメリカとカナダの両国を1人で代表する委員が出席していたのを記憶している。しかしISOとしては国際標準という立場から、ASTMは何としてもよい協力関係を保ちたい相手である。数年前からの交渉が実を結んでASTMの中でも大きな委員会であるD-1とジョイントしてTC35を開いたのは1996年6月サンフランシスコのことであった。其の次は1997年のミラノ、1998年のケープタウンを経て1999年にフロリダのオーランドが第2回、2000年ノールウエーのオスロの後、2001年のピッツバーグとこれで3回目になる。2000年（オスロ）にはASTMからはフジモト氏が来て、VOCの現状を講演している。このようにISOとASTMは急速に接近しているが、今年はそれをさらに一層深めることがあった。それはISO（TC35）とASTM（D1）との協約である。その骨子は、両者のいずれかに既に規格がある場合には、もう一方はその規格の作成は行わない、というもので、将にTC35～D1版ウイーン協定のような感じである。この協定は12日夕刻のソーシャル・イベントの席上で、TC35の委員長Prof. BanckenとASTMのD1の委員長 Mr. Praschanが国家間条約の調印式のようにサインした文書を交換して成立した。

2. 日本の立場

従来からISOはヨーロッパ中心だと言われてきた。事実、TC35でも実際にISOのためにヴォランテ

ィアとして働いてきた委員は主としてヨーロッパ勢である。その他では南アフリカ、イスラエル、

（Mr. Heiden-Heimerが活躍していたが、彼がリタイアしたら今年は誰も来なかった）日本である。中華民国、韓国はまだ会議のレギュラーメンバーとは言えない。TC35のP-メンバーにはフィリピンも入っているが会議に出席した記憶はない。

加盟以来の日本の委員が努力を重ねてきたおかげで、日本はかなり期待されていると言えよう。少々ピントが外れた話になるが、代表者会議で次回以降の会議開催地について話していたら「ヨーロッパ、アメリカ、日本で回り持ちにしたら」という発言もあった。たぶんに冗談じみているとしても、日本の地位についての一つの見方の現れともみることができるだろう。

しかしそれにはDINやBS→CEN→ISOあるいはASTM→ISOという流れに対してJIS→ISOはまだ件数も少ない。これからのISO/TC35に対する日本の基本的な態度というか戦略というか、を鮮明にしておく必要があるだろうし、それを議論し、確立することはTC35国内委員会の果たすべき機能の一つであろう。P-メンバーに加入したばかりで、あまり勝手もわからず、ケース・バイ・ケースでよきに計らえと、柔軟なようで実は主体性も方針もなかった頃と違って、ここ数年は組織の考え方も、事務的にも整備されてきたことは大変ありがたい。

今回の会議でも、出席者それぞれの努力で（その背後には国内委員会の委員のご協力があったことを記しておこう）かなりの成果が挙げられた。日頃、ISO活動のために支援と配慮を与えてくださっている関係者の方々には深い感謝を表明しておこう。と言っても、TC35やSC9の国内委員会での、戦略についての議論の不足や、業界としての認識については問題があることを、折りに触れて感ずることである。

3. バックとサポート

ISO規格の審議にしても、ニューワークアイテムの提案にしても、これからはデータの裏付けなしには自信をもった主張はできない。いつまでも「甚だしくなく」、「格別に困難でなく」「著しい異常を認めず」では規格にならないのである。そのバックデータと、理論的根拠を誰が何処で作成するか、考えておかないと行き詰まってしまう。今は、それぞれのWGの国内委員の方の、それぞれ全くヴォランティアとしての活動に依存しているが、それには限界があろう。いずれ、それに専念できる機関が必要になるだろう。また、ニューワークアイテムを提案する場合には、既存の類似の規格とその推移を十分に調べておかなければならない。

夢は、イギリスのPaint Research Institute, ドイツのForshungsinstitut fuer Pigment und Lacke, ベルギーのCoatings Research Institute (ここについては奥田聡教授が日塗検ニュースNo.82-(1995年6月)に紹介を書かれている)などのような機関をもつことである。

4. ピッツバーグ

ISOはInternational Sightseeing Organizationとも読めるけれど、実際の出張はそんなにのんきなものではない。着いて、会議して、終わったら帰ってくるのだから、大阪あたりで会議するのと本質的には変わらない。とは言っても、それぞれの町を知るのは楽しみである。ピッツバーグ、アメリカ第2の町、ピッツバーグ大学、ピッツバーグ交響楽団(1926年創立である)、モノガヘラ川とアレゲニー川が合流してオハイオ川になるゴールドেন্টライアングルを中心とする美しい町である。

今回の出席者のうち、筒井委員はここの大学に留学していたし、井関委員は何度も訪問した町である。私自身もずいぶん前にきたことがある。PPGの本社があるのだから、塗料関係者ではおなじみ

の人が多いだろう。井関委員の話では、ここ数年で新しい高層ビルが沢山できて、ところによってはすっかり変わってしまったということである。映画や小説でなじんでいた鉄工業の町というイメージはない。鉄道の終着駅はショッピングモールとレストランになっていた。

期間中、雨は一度も降らなかった。日曜日、筒井委員の案内で一同揃ってピッツバーグ大学の尖塔(下のイラスト参照)からの眺望を楽しみ、丘上の公園でピクニックしている人々の間を歩き、アートミュージアムで静かな時間を過ごした。夕方からワシントンマウンテンの上の、街を見下ろすレストラン、ジョージタウン・インで日没の美しさを堪能した。暮れてからの街の灯のきらめき、川面を滑る遊覧船、快い疲労で眠りについた1日だった。

